

きみちゃんや、
きゆうりは食べるかい？

ありがとう、おばさん。

おばさんは、少し腰が曲がっている。
その曲がった腰で、皆んなの食事の支度をする。その忙しなく働く姿が、きみちゃんは少し切なかつた。

母さんは言った。

おばさんは、苦勞が多い人だからね、とつても優しい人なのよ。

新潟の十日町市に、塩ノ又という地域がある。塩ノ又は、別名、神の住む山とも言われていた。この辺りの地域で、最も高い場所にあるかららしい。

小学四年生の夏、わたしは、初めてこの、塩ノ又へ行つた。

*

その楽器、なんていうんだい？

バイオリンっていうの、おばさん。

おばさんは、曲がった腰の後ろに手を当てて、きみちゃんに近寄ってきた。

二人の間には、ゆつくりと、涼しい風が流れていった。

おばさんと話したのは数十秒にも満たなかったのかもしれない。

でも、おばさんと見つめあったその瞬間は、まるで時が止まったかのようにゆつくりとした時間だった。

しばらくして、おばさんは、
お夕飯の支度をしに家に戻った。

きみちゃんは、少しホツとした。

バイオリンの練習をしようと思つて、玄関の先にきたのだけれど、おばさんに話しかけられると途端に恥ずかしくなつて、音を出せなくなつてしまったのだ。

この春始めたバイオリンを、

母の提案で田舎に持つてきた。

「大自然の中で弾いたら、きつと気持ちがいいわよ、おばさんに聴かせてあげてごらん。」

半ば強引に、母はバイオリンを車に詰め込んだ。

母は、沢山のことを思いつく人だ。

田んぼの青い匂いが、心地良い。
塩ノ又はいつも曇っていたが、なぜだかどんよりとした気持ちにはならなかった。

深呼吸をすると、身体の隅々にまで、気持ちの良い空気が流れ込む気がした。
きみちゃんは、すぐにこの田園風景が好きになった。

*
*

夜になった。あたりは少し、薄暗くなった。

今日は外で宴会だ。
塩ノ又の親戚一同が、みんな集まっている。おじさんにおばさんに、いとこの家族、合わせて二十人はいた。

同世代の子供もいただろうか、薄暗くて、少し分かりにくい。なんせこのあたりには、街灯が少ない。

「蟻地獄みつけた？蟻地獄！」

家の周りにある蟻地獄を、子供たちが探していた。

あたりにはカエルの合唱が響いていた。みな地べたに座り、宴がはじまる。

「ねえねえ、おじさんが誰だか知ってる？」

知らないおじさんが、話しかけてきては、色々な冗談を言う。ビールを飲んでいたからか、おじさんは熱気に帯びていた。

おじさんの冗談はほとんど理解できなかったけれど、きみちゃんもなんだか、

楽しい気持ちになつていた。

大人の言う冗談は、ちよつぴり難しい上に、方言が強くてなおさら分からなかった。

「ねえきみちゃん、せつかくだからみんなの前でバイオリンを弾いたらどう？ 田舎はね、夜でも楽器を弾いても怒られないのよ。」

宴も中盤にさしかかった頃、

また母が、思いついた。

「ええー！聴きたいなあ、そりゃあ。」
冗談を言っていたおじさんが、食いついた。

みんなが一斉にこつちをみたので、きみちゃんは顔が熱くなつてしまった。

それでもきみちゃんは、自分が主役になつたみたいで、少し嬉しかった。

じゃあ、と言って

きみちゃんはバイオリンを取りに行く。

たった数メートルの移動なのに、たくさんの人の視線を浴びたからか、なんだかすごく遠く感じた。

真夏のコンクリートには少し温かさが残るが、夜も深まり、それも少しずつ冷えてきたみたいだ。

整備しきれしていないコンクリートが、歩くとたびにジャリジャリと鳴る。

きみちゃんは、みんなに背を向けて、バイオリンを構えた。

みんなの方を向いたら視線が刺さるようで、胸が痛くなってしまうからだ。

おいおい！なんで後ろ向きなんだ？冗談を言っていたおじさんが、茶々を入れてくる。

でも、おじさんの冗談も、みんなの笑いも、何故だかあたたかかった。

その笑いが、いくらかきみちゃんの緊張を解いてくれた。

あたりがしんと、静まり返った。

この数秒が、なんて長く、重たい。

スツと息を吸ったら、

自分でも知らぬ間に演奏が始まったみたいだった。

始まりのレの音が、

田んぼの匂いと調和して、宴会会場を包み込んだ。

きみちゃんは、「ここにいるみんなと繋がれた」薄暗い田園をぼんやりと眺

めながら、なぜだかそう思った。

こんな響いた音は初めてだったからだ。

左手の指に響く弦の振動が、こんなにも気持ちがいい。

曲はあつという間に終わりに差し掛かったが、まだ終わりがたくなかった。

最後のレの音と共に、
きみちちゃんは、拍手喝采に包み込まれた。
振り返って、すこしだけ、はにかんでみせた。

おばさんが、しわくちゃの笑顔だった。
おじさんは、何度もうなづいていた。

みんながずいぶんと長い間、拍手をしていたように感じた。

この音楽の体験は、きみちゃんのところに、熱い塊を残した。

それから滞在中の数日間、きみちちゃんは
塩ノ又で、後ろ向きのバイオリニストと呼ばれるようになった。

新潟の十日町市。神の住む山、塩ノ又。

わたしは、この場所が大好きになった。

田んぼに池に、いつも曇っているお空に、お夕飯の支度をするおばさん。すべてが心地いい。

塩ノ又に行つたのはその一回きりで、二回目は無かつた。

けれども、確かにここは、わたしのふるさとだつた。

おばさんに会つたのは、あれが最初で最後だつた。

ただ、もう一度会いたい。

数年前、

山の神様になつたおばさん、

大人になつたきみちゃんは今でもあの日の曲を弾く。

あなたを想つて一曲弾けば、
塩ノ又に私の音が響き渡る。

あなたに、バイオリンを。

ありがとう、おばさん。